JCA NEWS

Japan Communication Association (JCA) Newsletter　日本コミュニケーション学会ニュースレター

CONTENTS

1. 巻頭言 …… 1
2. 私にとってコミュニケーション学とは …… 3
3. 2020年度 第2回理事会報告 …… 6
4. 学術局からのお知らせ …… 11
5. 第50回記念年次大会
　発表論文・企画セッション募集 …… 12
6. 事務局報告 …… 13
7. 広報局便り …… 15
8. 支部ニュース …… 16
9. マイページ登録のお願い …… 20
10. 編集後記 …… 20

126
2021.2

日本コミュニケーション学会事務局　〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター 日本コミュニケーション学会事務局
TEL. 03-6824-9372　Email: jcom-post@bunken.co.jp　URL: http://jca1971.com

日本学術会議協力
学術研究団体

巻 頭 言

会議考

副学術局長（ジャーナル担当）
大橋理枝（放送大学）

「最近会議が多くて書類の整理が捗るんだよね～。」というのは先日聞いた同僚教員の弁である。多分私が余程キョトンとしていたのだろう、その同僚は説明を加えてくれた。「会議が始まると机の前に座って、片っ端から書類をスキャンして、終わったらシュレッダーにかける。そうすると積み上がっていた書類がどんどん片付いていくわけ。今年は随分いろいろ片付いたよ。」なるほど、ビデオもマイクもオフにしたままでの出席を求められる会議ならではか。

今年度のはじめから、私が所属している大学では全ての会議がオンラインでの開催になった。勿論新型コロナウイルスの感染防止対策が主な目的だが、このオンライン会議が学内の様々なところで好評を博している。勿論、会議がある日にそのためだけに出勤しなければならなかった教員にとっては、自宅から会議に参加できることのメリットはかなり大きい。加えて、冒頭に書いたような形で会議に「出席」することができれば、今まで会議のために費やしていた時間を同時に別のことに使えることになり、時間の「有効活用」にもなる。更に、別の同僚教員から聞いたオンライン会議のメリットとして、今まで発言しなかった人が発言するようになって意見が多様化した、という点が挙げられる。この教員の分析によれば、対面の会議では出席しているメンバーの数や立場に気圧されて意見を言い辛かった人が、オンラインになった途端に出席者全員が画面の中の同じ大きさの映像（若しくは単なる名前の表記）に矮小化されるので、対面で感じられた存在感や圧力が明らかに減じられるせいで意見を言い易くなるのだろうとのことである。

一方、会議がオンラインになったことで、今まで行われていたのに行われなくなった事柄もある。とある会議は確実に昼食時に掛かる時間帯に行われており、今まで対面で会議をしていた時は昼時になると各自が昼食を広げ、食べながら会議を続けていた。今年度も同じ時間帯に行われているのだが、何故かこの

会議（カメラはオンにした状態での参加が求められている）の画面内で食事をしている人を見たことがない。私自身は自宅ではコンピューターが置いてある部屋とモノを食べる部屋とを分けているので会議中に昼食を食べることができなくなったというのが実情だが、明らかに炬燵の中から「出席」している教員も、会議中に昼食を食べている様子はない。この会議とほぼ連続して行われる次の会議がカメラもマイクもオフにした状態での出席が求められる会議なので、きっとみんなそちらの会議中に食べているのだろう。こちらは長い会議なので、仮に暫く席を外して昼食を摂っていても、「会議室」に接続してさえいればバレることはない。最近私は長丁場の会議だと他のメンバーとの個人間チャットでお喋りをしたりツッコミを入れたりしながら「出席」している。対面で行われていた時にはできなかったことである。

が、ここに来て、「会議」とは何なのだろうか？ということが気になってきた。

勿論、異文化間コミュニケーションの分野では、会議の捉え方に文化差があるということは知られている。ある文化では会議はより良い結論を出すために丁々発止で議論を戦わせる場であり、別の文化では予め別のところで議論された原案を最終的に承認する場であると捉えられているという。だが、「議論のための会議」ではともかく、「承認」型の会議では内容的にどのようなやり取りがなされるかということとは別の次元で、物理的に会議の場に「居る」こと自体に意味があるのではないかと思えて来た。つまり、ある会議に「出席」するということは、その会議の案件についてのコミットメントを時空間の共有によって表現している、ということだったのではないだろうか。物理的に出席していれば基本的には会議中に並行して別のことをすることはできない（許されてはいない）からこそ、そのことで出席者の人的な関わりを担保していたのではないか。

会議の中で意見を述べれば、勿論それは案件に対して自分が関係者であることを表明することになる。その点に於いて、オンライン会議で意見が言い易いならオンライン会議も一利ある。が、仮に会議の場で活発に言語を用いた議論が交わされることがなくても、会議の場に「居る」ことによって「この案件についてみんなで考えた」という感覚を共有し、その結果としての「承認」だったのだとしたらオンライン会議は会議の要件を満たさない。物理的に空間を共有しない形で「出席」するようになった会議は「一通り意見は聞きました」（だからトップダウンで決めたことではありません）、という形式にしかならないだろう。

会議という、言語的に何を表現するかが最も問われるような場でさえ、「居る」ということ自体がメッセージになっていたことに気付き、改めてコミュニケーションの「身体性」を実感している。

私にとってコミュニケーション学とは

日本コミュニケーション学会理事（50 周年記念担当）
前会長（2009 年～2014 年）
宮原　哲　（西南学院大学）

長老といえば聞こえはいいが、年寄りメンバーが言い残したいことを綴る企画－この学問との出合いから今まで、そして今後に期待すること－が少しでもお役に立てば幸いです。

言葉への関心

交換学生として 1976 年に初渡米し、コミュニケーション学と出合い…、だとカッコいいが、そうではない。帰国後日本再適応に苦しみ、「アメリカに帰りたい」という気持ちから、口実として大学院、そして一番に決めるべき分野を「何でもいい。コミュニケーションなんて楽しそう」という、大学院を目指す人にはとてもお勧めできない順番で進路を決めた。

だから、この学問と出合った瞬間は特定できない。生来人と違った言動が好きだったことが災い、いや、きっかけにはなったようだ。小学校では放送部で毎日全校に向けて語り、中学・高校では吹奏楽でトランペットを吹く目立ちたがり屋、ミーハーな性格が「英語を使って外交官か海外特派員に」という志を生んだ。子どもの頃から何となく感じていた、人と分かり合うには言葉だけではないが、でもやっぱり言葉は大事と納得し、それは今も続いている。

実践面（Applied Communication）への関心

ペンシルベニア州立大学大学院で指導教授に「何を勉強したいの」と尋ねられ、当時唯一知っていた intercultural communication と答えた。しかし、今思えば本当は cross-cultural communication だった。前者は異文化間のコミュニケーション、後者は「同じ」対人コミュニケーションでもたとえば日米では何がどのように、なぜ違うのかという「コミュニケーションの異文化比較」である。

Ph.D.論文では当時注目の的だった日本的経営に目をつけ、米国で「日本的」とされているコミュニケーションと実態との差について、東京の三菱自動車本社でフィールドワークをした。最初の就職先、ペンシル

ベニア州立ウェスト・チェスター大学ではそれまで受講さえしたことがなかった Persuasion を必死で授業する傍ら、対人、組織、異文化の領域を混ぜた研究領域を探し続けた。米国での大学教員生活は挑戦も多かったが楽しかったし、今でも当時の学科長とは親しくしているが、いつかは日本に、という気持ちは常にあった。

だが、大学教員に固執していたわけではない。それは、言葉への関心を抱き続けるのと同時に、「社会に貢献できなければ、どんな学問も研究の価値は低い」という信念があったからだ。実際、企業への就職も考え博報堂マッキャンエリクソンという広告会社から内定をもらっていたくらいである。結局はずっと大学での生活を送ってきたものの、コミュニケーションの実践面への関心が薄れたことはない。したがって、言葉への関心をさまざまな状況にあてはめる、コンテキスト主導の Applied Communication が私の研究者としてのアイデンティティーを言い当ててくれる分類だと思っている。

日本でのコミュニケーション（学）への関心の広報

実践の場で言葉、コミュニケーションに関する問題や不安、感動を味わう人たちの声を直接聞かなければ、研究には意味がないという考えの下、ここ 15 年程関心の矛先を医療に向けている。外交官や海外特派員の前は医師が将来の夢だったが、数学の成績が悪くなりあきらめたものの、今少しでもその分野に近づけたことはうれしい。

研究と実践面をどう「循環」させてきたかというと、メディアでコミュニケーションの大切さ、難しさ、楽しさを伝えてきたことには少しだけ自負がある。西日本新聞というブロック紙での「コミュニケーション哲学」の連載は通算 300 回を超え、テレビ、ラジオでもコミュニケーションのさまざまな側面を語ってきた。そして、企業、病院、市民センターなどでの研修や講演でさまざまな人たちとの出会いがあった。少し珍しいところでは、航空自衛隊、航空管制塔、警察学校、医師会、弁護士会、結婚相談所など、普通では出会えない人たちとの語り合いを通して多くの研究課題を得ることができた。

「（日本の）コミュニケーション学にとっての私」

「私のおかげで研究が…」と自画自賛ではなく、日本のコミュニケーション学研究の発展を私は邪魔してきたのかも、と思うようにもなってきた。

コミュニケーション学を「実学」として広める努力をしてきたが、「今の理論、概念、研究法は欧米（特に米）主導で、文化的背景が異なる日本には適用できない。早く日本的コミュニケーションの理論化を」と一貫して語ってきた。しかし、「間人主義」、遠慮や察しといった日本の特徴を紹介してきたものの、それらを統合した研究ができたかは疑問である。意図はしなかったが、結局は米国産理論や研究を押し付ける片棒を担いできたのかもしれない。

JCA 会長としてある支部にお邪魔し、「過剰敬語やへりくだり過ぎに代表される、保身の優しさ、『フワフワした人間関係』が日本に蔓延している。言いたいことを言わないと、そのうち言いたいことがなくなる…」と発言した時だった。ある先生に「宮原先生、それは思いやりを示し、余計な衝突を防ぐために日本人が築いてきた関係なのですよ」と言われてハッとした。もちろんそれを知らなかったわけでもなければ、フワフワ関係を全面否定する気も毛頭ない。しかし、気がつかない間に私は自分に心地よい、直球勝負、目立ちたがり、ミーハーなど、米国では奇異と思われないコミュニケーションを実践し、それを人にも勧めてきたのではないか。

石井敏先生が、「この学会『日本』の名がついているのに、欧米理論や研究法ばかりで悲しい」と嘆いておられた。私は心の中で「そんなことはない。そう見えるかもしれないが、『とりあえず』、『あえて』欧米産を使い、それから『逸脱』する部分に光を当てることで日本産ができる」と言っていた。どこまでできたかは分からないが、日本的コミュニケーションの日本的理論構築の努力はひと時も忘れたことはない。

デジタル化の影響なのか、人々のコミュニケーション能力は近年低下していると思えてならない。政治家も教師も、大人も子どもも言葉を単なる音、あるいはせいぜい記号としてしかとらえていない。思っていることを言葉で運び、表現して思いを確認したり、強化したり、そしてさまざまな考えを生かしたうえで「止揚」を可能にする、深い、本音のぶつかり合いなど見る機会がない。コミュニケーション学の研究領域を再確認し、研究結果を実践に結び付けるつながりの形成を急ぐ必要がある。今後、いつまで続けられるかは分からないが、社会に貢献できる日本と欧米のハイブリッド型コミュニケーションの研究と実践を目指したい。

2020 年度 第２回理事会報告

日　時：2020 年 10 月 3 日 (土) 13 時～16 時 20 分
会　場：オンラインでの開催

上記日程・会場において、2020 年度第 2 回理事会が開催された。会長、副会長（2 名）、理事 17 名の出席により理事会は成立した。

【会長挨拶】

ご多用のところ、ご出席いただきありがとうございます。普段は 12 月に開催されている理事会ですが、年次大会に関する検討事項もあり、10 月に繰り上げての開催となりました。大会については、どのような形で 50 周年を活かすかが大きな課題だと思います。よろしくお願いいたします。

【審議事項】

【1】第 50 回年次大会（第 50 回・第 51 回合同年次大会）関連

1. 学術局

（1）大会名称・開催形態・発表締め切りなどについて（小西）

来年度年次大会の名称（「50 回」「50 周年」など）と開催形態などについて審議された結果、以下の通り承認された。なお、審議に先立って、来年度年次大会の発表者は今年度の発表予定者がスライドすることになるが、この 1 年間で他の学会との二重発表にならないよう、発表予定者に注意喚起を行うことが確認された。

―来年度年次大会の大会名称について

来年度年次大会の名称は「第 50 回記念大会」とする。

―来年度年次大会の開催形態について

来年度年次大会はオンライン開催とする。

―そのほか

学術局と広報局を中心に、会員のなかからオンライン開催に関する技術を有する人を集めて、ワーキンググループを設置する。ワーキンググループのメンバーは、高井会長が依頼・任命し、事実上、来年度年次大会の実行委員会となる。まずは各局理事から下記の通りメンバーが選ばれ、この 7 名を核として来年度年次大会の準備が進められることとなった。

2021 年度年次大会（第 50 回記念大会）WG メンバー

守崎、小西、日高、松本、小山、松島、田島

【2】各局

1. 事務局

（1）JCA 支部大会助成金の使用用途に関して（宮脇）

支部大会等がオンライン開催された場合の支部助成金使用について、審議の結果、以下の通り承認された。

―交通費（オンライン開催の場合）

運営委員＝支給しない

講師＝支給しない。ただし、自宅以外の場所（運営委員の大学の施設など）を使用する場合は支給する。

―交通費（オンライン開催で、事前打ち合わせが対面の場合）

運営委員＝支給しない

講師＝支給しない

―講師謝金

オフラインで JCA 会員以外の方に講演をしていただくならば、従来通り支払う。

―アルバイト代

オンライン開催で必要な業務に応じて、従来通り支払う（時給換算：時給 1000 円を目安とする）。

―オンラインシステム構築・管理費

ウェブサイト構築などを業者に委託するなどした場合、支部助成金から支払う。もし支部助成金では賄えそうにないときは、事務局に相談する。

2. 学術局

（1）今後の年次大会の運営について（小西）

年次大会業務における学術局と支部の業務分担について、より明確にしたほうがよいとの問題提起があった。このことについて、審議の結果、以下の通り承認された。

学術局＝大会テーマの設定とそれに基づく講演者の選定・依頼・調整、大会プログラムの作成。

支部＝会場確保と当日の運営業務（受付や会場案内設置など）。

（2）ジャーナル関連（大橋）

現在の発行時期では、学会の年度設定との兼ね合いから、①「新年度の最初のジャーナルが第 2 号となってしまう」、②「査読委員の任期（8 月～2 年後の 7 月）と合わない」という問題が生じているとの報告があった。審議の結果、次の対応が承認された。

①今後、ある巻号への掲載論文が 2 本以下となる場合は合冊版を作成し、その次の巻号から発行時期を変更する（5 月発行分を第 1 号、11 月発行分を第 2 号とする）。

②2022 年度から、査読委員の任期を 4 月～3 月（2 年）に変更する。

【3】その他

学術局より、来年度年次大会の開催日程について、2021 年6月 12 日・13 日を第 1 候補、6 月 5 日・6 日を第 2 候補として調整を進めるとの提案があり、承認された。

【報告事項】

【1】第 50 回年次大会（第 50 回・第 51 回合同年次大会）関連

1. 学術局（小西）

発表論文の投稿締め切りは 2021 年 2 月 1 日とすることが報告された。また、オンライン開催となることもニュースレター等でできるだけ早く周知するとの説明があった。

【2】各局

1．事務局

（1）JCA 支部大会助成金の使用用途に関して（宮脇）

―支部大会や支部の研究会当日のお弁当代

支部大会などの活動がオンラインで開催される場合、お弁当代は支給しないとの報告があった。これは「当日の業務で会場を離れられない」という事態が想定されないことにくわえて、お弁当を直接配布できないために現金支給＝謝金扱いとなってしまう（手数料も発生する）からである。

―講師への謝金、交通費

昨年度の理事会で方針は決定済であり、今後もこれに従うことが報告された。講師の謝金・交通費を支払う場合、国際文献社への手数料 6500 円（納付書作成手数料：1 イベントにつき 5000 円、支払作成調書手数料：一人につき 1500 円）と、源泉徴収税（支払い額の 10.21％）を支払う必要がある。

（2）ニュースレターの発行時期について（松島）

現在の発行スケジュールでは 3 月理事会の報告が年次大会後に周知されるなどの問題があるため、広報局と連携しながら改善案を検討中であるとの報告があった。

（3）入退会者および会費納入報告（脇）

会員数と入退会者の確認について報告があった。理事会時点での会員全体数は 339 名（一般会員：317 名、学生会員：20 名、準会員：2 名）であり、前回理事会から 1 名増となった。

2．学術局

（1）ジャーナル関連（大橋）

―『日本コミュニケーション研究』第 49 巻第 1 号の刊行

第 49 巻第 1 号が 2020 年 11 月 30 日に発行予定（論文 3 本掲載）との報告があった。

―『日本コミュニケーション研究』第 49 巻第 2 号の刊行準備

第 49 巻第 2 号は、2021 年 5 月 31 日に発行予定であり、投稿論文 5 本を現在査読中との報告があった。

―『日本コミュニケーション研究』第 50 巻第 1 号の原稿募集

第 50 巻第 1 号は、2021 年 1 月 31 日を投稿締切としており、この情報は HP にて周知済みとの報告があった。また、前回理事会で承認された投稿規程（改定版）を周知・適用するとの説明もされた。

―査読委員会委員の任期満了と再依頼

査読委員は現在 25 名であり、このたび任期満了を迎えた方に再依頼をした旨の報告があった。また、投稿される論文に研究領域や研究方法の偶発的な偏りがあり、それらに対応するために査読委員を増員したとの報告がされた。

3．広報局

（1）ニュースレター124 号の発行と 125 号の予定（今井）

ニュースレター124 号（2020 年 7 月号）が発行され、次号となる 125 号は 2020 年 11 月初旬発行予定であるとの報告があった。また、次号 125 号から新企画がスタートし、その第 1 回は五島前会長に執筆依頼をしたとの説明がされた。

（2）HP への掲載情報（宮崎）

以下の情報（前回理事会以降、17 件）が学会 HP に掲載されたとの報告があった。また、これらの情報は学会 Twitter でも周知済みであると説明された。

・2020 年 09 月 18 日【ニュース】電気通信普及財団　2020 年度下半期の助成・援助に関する公募情報に関して
・2020 年 09 月 14 日【ニュース】9 月 19 日（土）中部支部研究会開催のお知らせ
・2020 年 09 月 10 日【ニュース】11 月 14 日（土）関西支部大会開催、研究発表募集のお知らせ
・2020 年 09 月 08 日【ニュース】学会公式 Twitter アカウントが開設されました
・2020 年 09 月 08 日【ニュース】中部支部 NL 第 10 号発行されました
・2020 年 08 月 24 日【ニュース】教員公募のお知らせ（武庫川女子大学）期日延長
・2020 年 08 月 06 日【ニュース】「2020 年度電気通信普及財団賞（第 36 回）」論文募集のお知らせ
・2020 年 07 月 30 日【ニュース】教員公募のお知らせ（福島県立医科大学）
・2020 年 07 月 13 日【ニュース】ニュースレター124 号を発行しました
・2020 年 07 月 08 日【ニュース】豪雨災害で被災された皆さまへ
・2020 年 07 月 06 日【ニュース】教員公募のお知らせ（国際基督教大学）
・2020 年 07 月 06 日【ニュース】教員公募のお知らせ（武庫川女子大学）
・2020 年 06 月 29 日【ニュース】教員公募のお知らせ（東京女子大学）
・2020 年 06 月 29 日【ニュース】教員公募のお知らせ（明治大学）
・2020 年 06 月 27 日【ニュース】教員公募のお知らせ（福岡女学院大学）
・2020 年 06 月 18 日【ニュース】教員公募のお知らせ（立教大学）
・2020 年 05 月 15 日【ニュース】電気通信普及財団 2020 年度上半期公募の表彰、助成・援助に関するお知らせ

（3）ML／Twitter での情報発信（松本）

友池広報局運営委員の尽力により 9 月 8 日付で学会 Twitter（https://twitter.com/jca_1971）の運営が開始され、すでに 5 件の情報が発信されているとの報告があった。今後も次の情報を中心に発信を行う予定であるとの説明がされた。

年次大会の案内／基調講演の案内／支部情報（大会・研究会）の案内／ニュースレター発行の案内／学会誌発行の案内／学会受賞書・論文の紹介

また、学会 Twitter では学会 HP に載せた情報を同時配信する方針であるとの報告もされた。なお、情報周知の依頼先については、会員メーリングリストでの周知は松本広報局長へ、学会 Twitter での周知は友池運営委員へ、とのことであった。

（4）ML 配信システムへのメール登録（マイページの会員情報更新）のお願い（松本）
前回の理事会に引き続いて、会員メーリングリストでのメールが届いていないと思われる宛先が、40 件ほどあるとの報告がされた。改めて、マイページの会員情報（メールアドレス）更新について、支部長からも周知してほしいとの要請がされた。

【3】各支部報告
各支部報告を参照。

【4】その他
事務局より、これまで白鴎大学図書館が一般会員として登録されていたが、他の大学図書館と同様にジャーナルを寄贈することとなった旨の報告がされた。これに伴い、白鴎大学図書館の今年度分年会費は返金することとなった。

【5】次回理事会開催日時・会場
３月下旬を候補として、後日調整する。

学術局からのお知らせ

学会誌に関するお知らせ

2020年11月に『日本コミュニケーション研究』第49巻第1号が無事発行されました。現在は2021年5月末に発行予定となっている第49巻第2号の準備が進められています。また、第50巻第1号の締め切りは2021年1月末となっております。第50巻第2号の締め切りは2021年7月31日を予定しています。是非皆様の研究論文をご投稿ください。投稿の際は（1）「論文」、（2）「シノプシス」、（3）「著者情報、並びに原稿作成に用いたOS及びソフトウェアなどの情報」の3つのファイルを、下記のメールアドレス宛に添付ファイルで送付してください。執筆・投稿の詳細は、公式ホームページにある「研究論文集投稿規程」・「学会誌執筆要項」を参照してください。前回以降修正された箇所もあります。是非一度ご確認ください。

送付の際、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付してください。送付先メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]caj1971.com
CC: ohashiri[@を入れる]ouj.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の大橋（ohashiri[@を入れる]ouj.ac.jp）までご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。

本学会では投稿された研究論文に対し、妥当性、体裁、研究方法（データ収集方法等含む）の適切性・倫理性、分析の緻密性・独創性、そして表現の明確性・厳密性の5点の規準で査読を行っています。今回は四番目の分析の緻密性・独創性についてお話しします。

編集委員長の職責の大きな部分は、投稿された論文の査読者を決めることなのですが、その際に投稿される論文を大きく分けて質的研究と量的研究に分けて考えています。査読を引き受けて下さる方々にはそれぞれのご専門の分野がありますが、ご専門にぴったり合致した内容の論文の査読をお願いできることは多くありません。ほとんどの場合、ご専門とは少し離れている分野の論文でも、査読をお願いせざるを得ないのですが、それでも可能な限り、量的研究をご専門にされている先生には量的研究の査読を、質的研究をご専門にされている先生には質的研究の査読を、それぞれお願いすることにより、分析の緻密性や独創性を評価して頂いています。どういうわけか、何回かに一度、量的／質的のどちらか片方の研究手法を用いた論文の投稿が集中してしまうことがあり、その時には慌てて当該研究手法を主に用いておられる先生にお願いして、急遽査読委員会に加わって頂くなどしてきました。毎回査読にご協力下さっている先生方には本当に心から御礼申し上げます。

そして、引き続き、皆様の研究成果のご投稿をお待ち申し上げております。

(副学術局長:ジャーナル担当　大橋理枝)

第５０回記念年次大会 発表論文・企画セッション募集

来年度２０２１年に開催される第５０回記念年次大会は、コロナウイルス感染症に関わる社会状況を踏まえ、オンラインで開催します。開催しなかった２０２０年６月のテーマ「コミュニケーション学の現在地／現在知(アクチュアリティ)」は、現在よりアクチュアリティを伴うものになっています。人類のコミュニケーションのあり方が変容した今、コミュニケーション学が置かれる現在地、それが作り出す現在知は一体どのようなものになっているのか。昨年の年次大会で発表できなかった研究や、昨年のコロナ禍がコミュニケーション研究者に突きつける危急性のある課題を考察する研究など、コミュニケーションを鍵語として知を創り出す「場」をオンラインで持てるよう、発表論文・企画セッションを募集いたします。以下をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

【大会開催要項】

○日程 ２０２１年6月１２日（土）・１３日（日）
○場所 オンライン開催
○テーマ 「コミュニケーション学の現在地／現在知(アクチュアリティ)」

【募集内容】

○応募締切（発表・企画申し込み原稿ファイル提出締切） ２０２１年2月１日

○応募・問合先 副学術局長 日高勝之(大会担当、立命館大学)
MAIL: k-hidaka [@を入れる]wa2.so-net.ne.jp

○募集①「研究発表」：質疑応答を含む３０分程度の、論文発表を前提としたいわゆる研究発表です。

○募集②「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした９０分程度の自由企画です。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、統一テーマの論文発表、模擬講義など。その他の企画案も可能のですので、学術局にご相談ください。

○応募方法
①発表・企画申し込み(プログラム掲載要旨申し込み)
※メール件名に「JCA 大会申込」と記してください。
※メール本文に「研究発表/企画セッションの別、演題/企画名、発表者の氏名・所属」を記してください。
※プログラム掲載用要旨原稿ファイルを添付してください。ファイル形式は自由です。要旨は発表言語（日本語または英語）で作成してください。要旨にも演題名、発表者氏名・所属を入れてください。
※本文字数は和文８００字以内、英文３００語以内です。

②発表原稿提出(プロシーディングス掲載要旨送付)
※プロシーディングス掲載要旨を 2021 年２月１日までにメール添付ファイルで送付してください。
※プロシーディングス掲載要旨は発表言語（日本語または英語）で作成してください。企画名・発表者氏名と所属も入れてください。字数は和文３０００字以内、英文１０００語以内(脚注含む)で、いずれもＡ４版縦置・横書で見開き２頁に収まる分量を目安にしてください。
※締め切り後、学術局で検討して発表・企画の採否をできるだけ速やかにお知らせします（おおむね ７～１０日）。

○その他
①個人発表は会員限定。グループ発表は筆頭者および発表者が会員限定です。非会員の発表希望者は応募時までに入会手続きを済ませてください。
②当初予定されていた２０２０年度の年次大会での発表が受理されていた研究発表と企画セッションは、発表者が希望される場合には５０回記念年次大会で発表ができます。連絡は上記応募・問い合わせ先までメイルしてください。

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. マイページの利用開始について

2019年12月から「マイページ」（会員情報管理システム）が利用できるようになりました。マイページの中で「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しいHPの右上のバナーからログインできますので、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書といっしょにお送りしております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

（1）日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。

（2）学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

3. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

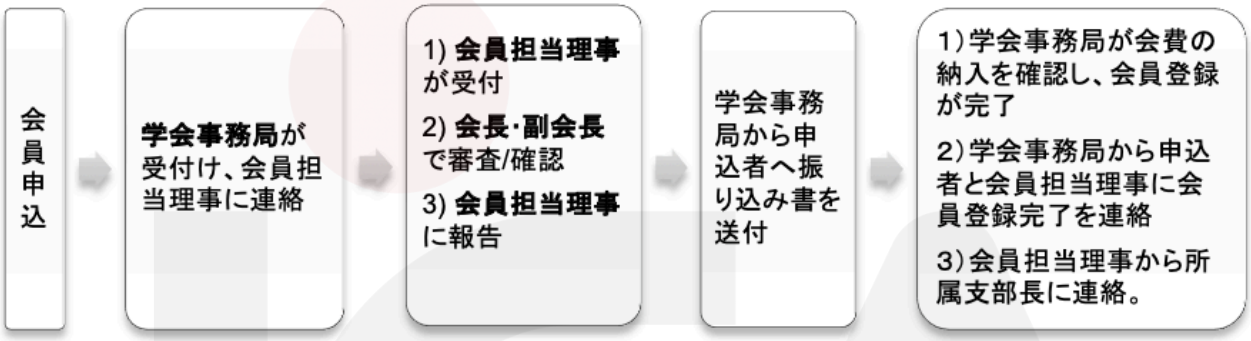
これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE（https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/）あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii（http://ci.nii.ac.jp/）にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

4. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がありましたら、学会事務局までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1．新刊情報提供のお願い

今後、広報局としては、会員の皆様の著書情報を学会公式 Twitter および ML で発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊や以前出版されたご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 Twitter 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

基本方針：http://jca1971.com/keynote

2．広報局からのお知らせ

① 広報局では、新規に構築された ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 20 ページのご案内を参照いただき、マイページへの登録手続き／メールアドレスの更新をお願いいたします。

② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。

③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。

ホームページ（http://jca1971.com/）は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。

（広報局長　松本健太郎）

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：今井達也（imatatsu.jca[@を入れる]gmail.com）

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で 1 枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で 1 枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ 書評

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評を受け付けております。

和文・英文で 1 枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

④ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会の NL 表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または版権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース

北海道支部

（支部長　佐々木智之）

コロナウィルス感染は、収束どころか悪化の一途をたどり、北海道は全国的に見ても感染者数が多い地域となりました。その影響で、役員会、支部研究会そして研究大会といった例年通りの支部活動が、延期ではなく中止を余儀なくされました。そんな中にあって、オンラインというシステムは役員間のコミュニケーションを再開させるひとつの突破口となりました。

2020 年 11 月 10 日夕刻に、オンラインによる役員会を行ったところ 8 名の参加があり、久しぶりの顔合わせとなりました。今年度内の活動をどうするかが当初予定した話し合いのメインテーマでしたが、その前に各役員の勤務先での状況を共有しました。前期開始時から全面オンラインと大学側から指定されているところもあれば、各教員の裁量にある程度委ねられているところもあり、多種多様でした。

実際にオンラインの講義をやってみて気づいた利点として、「講義準備に時間をかけるようになった」「chat 機能により学生の反応がよくなった」「個人の思考が邪魔されない」といった点が挙げられました。また自作した動画を提示された先生もいて、コロナウィルス禍においてどのように学生を鼓舞するかという発想の参考になりました。

役員会での意見交流を経て、「3 学会合同研究会」をオンラインでやることを提案するという結論に至り、現在は以下の骨子をもとに、3 学会間で調整を図っているところです。

2020 年度北海道 3 学会(HELES,JCA,JACET)合同研究会 開催骨子案

1.参加無料の Zoom によるオンライン開催とする

2. 2021 年 3 月第 1-3 週(3/1～3/19)の平日に二夜連続で開催し、各夜共に 18:30～20:00 の一時間半を開催時間とする

3.テーマ案は「オンライン授業の経験を語り合う～語学とコミュニケーション」とする。

4.プログラムは 4 セッションで第一夜に基調講演とパネルディスカッション、第二夜に研究発表 2-3 題とバズディスカッション(参加者全員意見交換)とする。

5.企画運営は当番学会 JCA 担当者をまとめ役として、3 学会各担当者で行う。

東北支部

（支部長　関 久美子）

昨年 11 月 14 日（土）、2020 年度大学英語教育学会（JACET）東北支部例会・日本コミュニケーション学会（JCA）第 21 回東北支部研究大会を、前年度に引き続き JACET 東北支部と合同で開催しました。今回はコロナ渦ということで、Zoom を使用したオンラインでの合同大会となりましたが、本支部からは研究発表が 3 本、JACET 東北支部からは実践報告が 1 本、そして大会の最後には、宮城教育大学特任教授の高橋先生よりご講演をいただきました。以下、当日のプログラムです。

実践報告

「工学系学生スローラーナーへの英語学習の取り組みと課題」

畠山 研（八戸工業大学・JACET 東北支部）

研究発表１
「ML を利用したネットコミュニケーションのあり方」
小島 正美（NPO 地域情報モラルネットワーク・JCA 東北支部）

研究発表２
「欧米とアセアン（準）英語圏への留学順序と目的分析」
小林 葉子（岩手大学・JCA 東北支部）

研究発表３
「青森県『医療通訳養成研修』における７年間の受講者背景と通訳技術および知識に関する考察」
川内 規会（青森県立保健大学・JCA 東北支部）

講演
「日英語の言語文化対照」
高橋 潔（宮城教育大学特任教授・前 JACET 東北支部 支部長）

また 2020 年度東北支部定例研究会の開催も予定しています。前回は COVID-19 のため中止となりましたが、今回はオンライン開催も考えております。このニュースレターがお手元に届く頃には詳細も決定しているかと思います。どうぞ、東北支部のＨＰやブログでご確認いただくか、関〔kseki［@を入れる］n-seriyo.ac.jp〕までお問合せください。

中部支部

（支部長　森泉 哲）

2020 年度支部大会の開催

コロナ禍の中で、９月の研究会はオンライン開催とした結果、他支部の会員の方も多く参加いただき、盛会となりました。

今年度の支部大会について、運営委員の先生方と協議したところ、オンライン研究会が主流になりつつある現在、双方向の議論が深まっていないのではないかという意見が多くありました。そこで、中部支部の身の丈に合わせて、大規模な会を想定せず、規模が小さくても、議論を尽くす目的で、対面での開催を目指していこうということになりました。

一方で、１月時点でも感染は拡大していますし、参加者の健康を損ねてまで対面で開催してはなりません。そこで、開催１週間前までに対面にするか、オンライン開催とするかを決定させていただきますので、ご参加いただける方は、事前に支部長までご連絡ください（moriizum[@マーク入れる]nanzan-u.ac.jp）。

今回のテーマとして、コロナ禍の中で各大学・研究者にとっては悩みを抱えている留学生受け入れ、国外留学、海外フィールドワークの課題をとりあげ、意見交換をすることとし、これまで留学生受け入れや異文化教育に実務・教育・研究の全ての側面において造詣の深い谷口紀仁先生に基調講演をお願いし、その後、参加者の先生方の各大学での取り組み・実践を踏まえながら、意見交換をしてみたいと思っております。

日時：2021 年３月 13 日（土）
14：00－16:00
場所：名古屋大学教育学部（予定）
＊オンライン開催となる可能性もあります。
＊開催１週間前までに詳細をお知らせいたします。

14：00　挨拶

14：05
講演「外国人留学生と日本人学生との異文化間接触について―研究・教育・実務の観点から－」
谷口紀仁先生（名古屋大学教育学部講師）

15：00　質疑応答・意見交換

16：00　閉会

皆様のご参加をお待ちしております。

中国・四国支部

（支部長　谷口直隆）

中国四国支部では、12 月 19 日（土）に Zoom を用いたオンラインで第 23 回支部大会を開催いたしました。今年度は、「コミュニケーションと身体性―新型コロナウィルスは私達のコミュニケーションをどう変えたのか―」をテーマにラウンドテーブル形式で開催しました。以下の３件の発表のあと、全体でディスカッションおよび、テーマに関わるそれぞれの気付きや実感の交流・共有を行いました。

谷口 直隆(広島修道大学)「オンライン授業における教師の身体性を問う」

Rudolf Reinelt（愛媛大学） How no-body Zoom cost me my next job

脇 忠幸（福山大学）「『コロナ禍のコミュケーション』は何が新しいのか」

例年同様、参加者は少なかったものの、時間いっぱいの議論が交わされ、テーマ設定の際に意識した「発表者以外の参加者も“当事者”として議論に参加する」という点は実現できたように思います。

コロナ禍によって引き起こされたコミュニケーションの変化や、変化したように見えて実はコロナ禍によって引き起こされたものではないもの、コミュニケーションにおけるこれからの身体（性）のあり方など、現状の洞察にとどまらず、“after コロナ”のコミュニケーションにまで議論が及びました。

また、他支部からもご参加をいただき、「オンライン開催でのラウンドテーブル形式」に前支部長から引き継がれた検討課題であった「支部の現状に見合った」大会の持ち方、運営の方法にも光を見たように思います。

コロナ禍の中でやむを得ず採用した大会運営の方法ではありましたが、今後、支部会員の皆様にもご意見をいただきながら、今後の支部大会運営、支部運営の方法を検討していければと考えています。

ご参加いただきましたみなさま、ありがとうございました。

関西支部

（支部長　小山 哲春）

関西支部では、COVID-19 感染拡大影響を受け、第 18 回関西支部大会を 2020 年 11 月 14 日（土）にオンライン（Zoom）で開催いたしました。今回の大会参加者は延べ 14 名（うち非会員が２名）、残念ながら懇親会は実施できませんでしたが、「雑談に与えたコロナの影響」というテーマでの大会開催に高井会長をはじめ、関西支部以外の皆様にもご参加いただき、大変実り多い大会となりました。

当日は、支部総会終了後、村田和代先生（龍谷大学）による講演、続いて森口稔先生（京都外国語大学による研究発表がおこなわれました。

2020 年 11 月 14 日（土曜）13:00～

大会テーマ：

「雑談に与えたコロナの影響」

基調講演：

「コロナ渦の今、あらためて雑談について考える」村田和代先生（龍谷大学）

研究発表：

「定義記述語彙を定めた非母語話者向け日日辞典について」森口稔先生（京都外国語大学）

村田先生のご講演後には参加者による活発な議論が交わされ、本年度主にオンラインとなった大学教育現場での雑談を含めたコミュニケーション

のあり方、今後の行末について深く考える機会となりました。ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。

関西支部では春期研究会を 2021 年 3 月に開催することを予定しております。詳細が決まりましたら HP、NL 等でご案内いたします。

九州支部

（支部長　吉武 正樹）

祝復活です！蛇足ですが、最近の NL は最初の一文字が赤の大きいフォントなので、今回「祝」を選んでみました（なお、過去２回は「夏」「秋」と、季節でそろえています）。

さて、何の復活がめでたいかと言いますと、コロナ禍のなか一度は開催を中止した 2020 年（令和２年）度第 27 回九州支部大会を、このたび「復活」させることにしました。

昨年度は 11 月２日に開催し、その２か月後には次の会場校と日程を決めていました。大会テーマや基調講演者の選定にかかろうとした矢先、コロナウイルス感染が発生そして拡大。行先が不透明ななか、「中止」という苦渋の決断をし、その代わりに支部紀要の特別企画の充実をお約束したのは、NL で周知のとおりです。

ですが、その際（NL 第 124 号）宣言しましたように、「転んでもただでは起きない」のが九州支部なんです。季節が変わり、他支部が工夫して活動を継続されている様子を拝見するにつれ、支部大会がなければ若手研究者の発表の場がなくなってしまう、九州支部の活動が先細りになってしまうのではないか、という思いが胸をくすぶってきました。

ということで、**2021 年３月 20 日（土）、第 27 回九州支部大会をオンラインで開催**します！規模は研究発表のみの小さな大会になりますが、支部活動の灯火をともし続けることができることを喜んでいます（支部紀要への投稿論文の応募締切も延長し、前出の特別企画も継続予定）。

このように報告すると、支部長の私が強いリーダシップを発揮し、支部大会復活に導いたかのように聞こえますが、実はそうではありません。実際は、九州支部事務局長である横溝彰彦先生（久留米工業高等専門学校）の案であり、悩む私をよそに、積極的に音頭を取っていただきました（横溝先生は私の学部時代の後輩ですが、持つべきはよき後輩、よき事務局長ですね）。日程についても、副支部長の平野順也先生（熊本大学）が調整してくださいました。

オンライン開催ですので、全国からも広くご出席いただくことが可能だと思います。詰めはこれからですが、詳細が決まりましたら ML で情報を共有しますので、チェックしてみてください。

最後に、前回の NL でもお伝えしたように、支部紀要『九州コミュニケーション研究』(KYUSHU COMMUNICATION STUDIES) 第 18 号も支部のホームページにアップされています。こちらもご一読ください。

季節は冬ですが、九州支部は暑（熱）い！

連絡先
〒162-0801
東京都新宿区山吹町 358-5　アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会事務局
Tel: 03-6824-9372
Fax: 03-5227-8631
jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、できるだけ早い時期にアクセスしていただいて、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒にお送りしております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

（1）日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。

（2）学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

今回のニュースレターで私が担当になってから１年分（年３回発行）のニュースレターに携わることになりました。この１年で私が学んだことは、学会というものはたくさんの人達の努力と工夫によって成り立っている、ということです。一会員としては見えていなかった『コミュニケーション学を共に学び合い、普及する』ための学会の機能を維持するために、目に見えない苦労や困難がそこにはあるのだということが分かりました。思えば、大学院生の頃から日本コミュニケーション学会には所属し、お世話になっていましたが、その頃とは学会との付き合い方が大きく変わりました。日本コミュニケーション学会が私に提供してくれた、さまざまな人々との出会いがなければ、今の私は無かったと言っても過言ではありません。この感謝を忘れずに、特に若い研究者や大学院生の方々に、数多くのチャンスやきっかけを与えられるような学会運営に携わっていければと思っています。と、小学生のような個人的感想をここに書いてしまいましたが、大目に見ていただければと存じます。みなさま今年もどうぞよろしくお願いいたします！

広報局 ニュースレター担当 今井達也